

A12CB045 A12CB060 A13CB015
A13CB082 A13CB100 A13CB106

摂食障害傾向と性格の関連性

問題

近年、痩身であることが魅力的であり、肥満はそうではないと批判的にみられる傾向にあると考えられる。特に、思春期・青年期の女性のほとんどは、減量の必要がない体型や体重であるにもかかわらず、さらに痩身になろうとダイエットに励んでいる（矢澤・金築・根建, 2013）。平成 21 年国民栄養調査（厚生労働省, 2009）によると、75.6%の成人女性が体重管理をしようと心がけており、その割合は平成 16 年に比べ、5.8%増加している。このような過度なダイエットによる無月経や摂食障害の発症が危惧され、その対策が求められている（大仁田・崔, 2013）。

ダイエット行動には、徐々に体重を減らしていくような比較的健康的なダイエット方法による構造的ダイエットと、急激に体重を減らし、健康に悪影響を及ぼすようなダイエット方法による非構造的ダイエットの 2 つがあることが松本・熊野・坂野（1997）により明らかにされている。また、その中でも摂食障害の傾向が強いほど構造、非構造のいずれのダイエットも高頻度で行っており、摂食障害に当てはまる群では非構造的ダイエット行動の頻度が高いことが示されている（松本ら, 1997）。

摂食障害とは、横山・小山（2005）によると、強いやせ願望、身体像の障害、肥満恐怖を基本的特徴とし、拒食、過食、排出などの食行動異常、るいそうとそれに伴う無月経などの症状が認められる精神疾患のことである。推定患者数は年間約 2 万 3 千人とされ、その中でも神経性食欲不振症が過半数を占めている（厚生省特定疾患中枢性摂食異常症調査研究班, 1998）。

摂食障害の原因について未だ決定的なものは明らかにされていないが、おそらく、そこには生物学的要因、社会・文化的要因、そして心理的要因がさまざまな度合いで関与しているものと考えられる（横山・小山, 2005）。

八田・仁平（2008）は、一般の女子高校生を対象に、摂食障害傾向と生活満足感や体型、疲労等に関する自己評価などとの関係を検討しており、その結果摂食障害傾向が高い人々は、自分の体型や生活全体に対する感じ方、評価の仕方に特徴があることを示している。

中野・臼田・中村（2010）は、摂食障害と完全主義、抑うつ、不安、強迫症状との関係を指摘している。摂食障害と対人恐怖症との完全主義を比較検討するための調査と研究を行い、考察をした中村（2004）によると、摂食障害目録において、摂食障害患者は健常者に比べて完全主義傾向が強いとした。また、摂食障害傾向を持つ者の MMPI 結果と摂食障

害傾向を持たない者の MMPI 結果の比較検討した大森（2005）によると、摂食障害傾向をもつ者は、健常者よりも不安感が強く、情緒表出の統制に問題があり、統制が強く服従的で自己主張ができないことが示唆されている。このことから、自分がどのような人物であるかを他者に言語的に伝える行為（榎本,1997）である自己開示が摂食障害傾向にある人は低いのではないかと考えられる。青年期の身体像の評価的側面である身体満足度が対人関係に及ぼす影響を検討した柴田（1990）は、対人場面において身体満足度は自己開示行動の様式に影響を与えると指摘している。

さらに、やせ願望や、食異常行動における心理的要因として自己意識が取り上げられている。自己意識とは自分自身に対して向けられた意識のことであり、公的自己意識と私的自己意識に大別され、公的自己意識・私的自己意識の保有傾向が食異常行動に影響を与える可能性が推測される（大仁田・崔,2013）。公的自己意識とは、他者から観察可能な自己の容姿や外見、行動などへの意識傾向であり、私的自己意識は、他者から観察不可能な自己の内面などへの意識傾向である（山蔦・野村,2005）。

女子大学生を対象に、自己意識保有傾向から摂食異常行動を検討した山蔦ら（2005）は公的自己意識が高い者は、全般的な身体像不安感や食物摂取コントロール不能感が強い可能性が示唆されている。

以上のことから、摂食障害傾向にある人は様々な心理的要因と関わりがあると考えられる。

目的

本研究では、摂食障害傾向を調べるものとして永田らの作成した SRSED 尺度を用いて、摂食障害になりやすい性格傾向との関連について検討することを目的とする。また、自己意識の中でも特に他者の目を意識する公的自己意識との関連も検討する。

仮説

仮説 1 摂食障害になりやすい人の性格として、完全主義傾向が強く、抑うつ的であり、他者に対して自分を表現することが難しく、情緒表出に問題があるため、自己開示がうまくできないと推測する。

仮説 2 摂食障害傾向にある人は、公的自己意識が高くなる。

方法

調査日時・場所 2015年6月24日 S 大学の大学教室で 14:35~14:45 の間に集団法にて実施した。

調査参加者 S 大学に所属する女子大生 122 名に実施し、有効回答数は 111 名（平均年齢 18.35 歳、SD=1.13）であった。

調査材料

① 性格について独自に作成した性格尺度

女子大学生 6 名の自由記述をもとに作成した性格尺度を表 2 に示した。「あてはまらない」から「あてはまる」の 4 件法で、全 33 項目である。下位尺度としては「完全主義」「抑うつ」「自己開示」の 3 つである。

表1.性格の質問項目

質問項目
[完全主義]
人の仕事の成果に対し、ほとんど満足できない
人のすることに対して十分だと感じられない
人は私の期待に応えてくれない
人のすることは、私が十分だと思う水準に達していない
人の仕事の結果を見て、もっとよくできるはずだと思いつつも落胆する
人には何に対しても、できる限りベストを尽くしてほしい
人には大きい期待を抱いている
人には高い望みをかけている
人には秩序を守る人間であってほしい
★ベストを尽くしたことがわかっていればそれでよい
[抑うつ]
憂鬱なことが多い
気が沈むことがある
朝のほう調子いい
疲れやすい
涙が止まらなくなることがある
普段からいらいらすることが多い
生活が空虚であると感じることが多い
自殺を試みようと考えたことがある
よく悲しくなる
集中力が続かない
自分を傷つけてみたくなる
★将来のことを考えると明るい気分になる
★いつもさわやかな気分である
[自己開示]
警戒心が強い
自分の気持ちを抑えてしまう
自分の性格のすごく嫌な部分を見られたくない
些細な欠点(時間にルーズ、など)について他者から心配された経験がある
過去の体験を話したくない
些細な欠点について思い悩んでいることを話したくない
過去のつらい景観が現在どのように役立っているかは話す必要がない
自分のせいで人が傷ついたことは誰にも話したくない
★人に自分の趣味を話したい
★休みの日に何をしているか人に話したい

②永田ら（1991）の作成した SRSED

EAT を基本にし、BITE の質問内容を参考にしつつ、日常の診察から得た過食症者の特徴を考慮して作成された SRSED 尺度を表 2 に示した。神経性無食症のみならず、神経症大食症をも含めて、摂食障害全般の臨床症状評価に有用で、かつスクーリングテストとして有用な質問紙である（大森,2005）。各項目に対し、「あてはまらない」から「あてはまる」の 4 件法で、全 29 項目である。

表2.SRSED(永田ら,1991)の質問項目

項目内容
いやな時や、つらい時、たくさん食べてしまいますか
まる1日、まったく食事をとらないことがありますか
食事に関する問題で、仕事や学校に差支えが出ていますか
毎日の生活が、食べ物のことに費やされてしまっていますか
食べたしたら止められず、おなかがいなくなるほど無茶食いをしたことがありますか
食べ物のことで頭がいっぱいですか
自分の食生活を恥ずかしいと思いますか
食べる量をコントロールできないのではないかと心配になりますか
無茶食いするために、はめを外してしまいませんか
食べすぎた後、後悔しますか
あなたがもっと食べるよう、家族が望んでいるように思いますか
みんなからやせているといわれますか
みんなが少しでも多くあなたに食べさせようとしていますか
体重が増えすぎるのではないかと心配をしますか
下剤を使っていますか
食べたカロリーを使い果たそうと一生懸命に運動していますか
いつも胃の中を空っぽにしておきたいと思いますか
食後、嘔吐したい衝動に駆られますか
体重が増えるのが怖いと思いますか
あなたは体重にとらわれすぎていると思いますか
みんなから非常にやせていると思われていますか
食後嘔吐しますか
普通にご飯を食べた後でも太った気になりますか
少しでも体重が増えると、ずっと増え続けるのではないかと心配になりますか
自分は役に立つ人間でみんなに必要だと思われていると思いますか
この頃、異性に対して関心がなくなりましたか
非常に多くの量を無茶食いしたことがありますか
非常に多くの量を無茶食いした時惨めな気持ちになりましたか

③菅原（1984）の作成した公的自己意識尺度

Fenigstein らの自意識尺度項目を参考とし、菅原が独自に作成した尺度を表 3 に示した。「まったく当てはまらない」から「非常に当てはまる」の 7 件法で、全 11 項目である。

表3.公的自己意識(菅原,1984)の質問項目

質問項目
自分が他人にどう思われているのか気になる
★世間体など気にならない
人に会うときどんな風にふるまえばよいのか気になる
自分の発言を他人がどう受け取ったか気になる
人に見られていると、つい格好をつけてしまう
自分の容姿を気にする方だ
自分についてのうわさに関心がある
人前で何かする時、自分のしぐさや姿が気になる
つねに、自分自身を見つめる目を忘れないようにしている
初対面の人に、自分の印象を悪くしないように気遣う
人の目に映る自分の姿に心を配る

★は逆転項目

結果

初めにデータ整理を行った。得られたデータに整理番号をつけ、質問項目に欠損のあるものはデータ処理の対象外とした。有効回答数は 111 名であり、すべて女性であった。

1.性格尺度についての分析

まず、性格尺度 33 項目の平均値、標準偏差を算出した。そのうち天井効果のみられた、「気が沈むことがある」「自分の性格のすごく嫌な部分をみられたくない」「疲れやすい」の 3 項目と、フロア効果のみられた「朝の方が疲れやすい」「自分を傷つけてみたくなる」の 2 項目合計 5 項目を以降の分析から除外した。

次に、残りの 28 項目に対して、主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。累積寄与率は 17.22、27.93、34.84、40.67、45.95・・・と変化し、また固有値の分析の%の減衰傾向が 17.22、10.71、6.91、5.83、5.28、4.67・・・であった。この結果と、解釈の可能性から 5 因子を抽出したが、第 5 因子は「自殺をしてみようと考えたことがある」「人に自分の趣味を話したい」の 2 項目から構成されており、因子の関連性が見られないと判断し以降の解釈からは除外し、最終的に 4 因子を性格尺度として採用した。また、「将来のことを考えると明るい気分になる」、「ベストを尽くしたことが分かっていたらそれでよい」、「集中力が続かない」、「生活が空虚であると感じることが多い」、「警戒心が強い」、「些細

な欠点（時間にルーズ、など）について他者から心配された経験がある」の6項目は因子負荷量が0.35未満で十分な因子負荷量を示さなかったため分析から除外した。性格尺度の因子パターンを表4に示した。

表4.性格尺度の因子分析結果(Promax回転後の因子パターン)

因子名	質問項目	因子				
		1	2	3	4	5
他者への高い要求水準	*休みの日に何をしているか人に話したい	-0.709	.151	.142	.050	-.191
	人には大きい期待を抱いている	.680	.015	.065	.023	-.021
	人には高い望みをかけている	.575	.133	.048	.147	.030
	人は何に対しても、できる限りベストを尽くしてほしい	.440	.254	.027	-.051	-.215
	人には秩序を守る人間であってほしい	.395	.060	.211	-.323	-.047
	*将来のことを考えると明るい気分になる	-.299	-.125	.290	-.120	.109
	*ベストを尽くしたことが分かっていたらそれでよい	-.263	-.042	.140	-.043	.034
完全主義	人のすることに対して十分だと感じられない	.026	.807	-.009	-.185	.099
	人のすることは私が十分だと思う水準に達していない	.177	.773	-.114	.027	-.013
	人は私の期待に応じてはくれない	.020	.690	.091	.029	-.171
	人の仕事の成果に対し、ほとんど満足できない	.011	.420	.065	.004	.095
	人の仕事の結果を見て、もっとよくできるはずだと思い、いつも落胆する	.335	.351	.086	.040	-.024
抑うつ	憂鬱なことが多い	-.031	.141	.726	-.040	-.025
	*いつもさわやかな気分である	-.309	-.019	.709	-.233	-.050
	普段からいらいらすることが多い	.033	.013	.686	.013	.105
	よく悲しくなる	.070	.013	.485	.279	.204
	自分の気持ちを抑えてしまう	.238	-.093	.451	.225	-.129
	集中力が続かない	.068	-.117	.213	.146	.085
閉鎖的	些細な欠点について思い悩んでいることを話したくない	.021	-.132	-.035	.819	-.118
	過去の体験を話したくない	-.019	.056	-.093	.603	.015
	自分のせいで人が傷ついたことは誰にも話したくない	.174	-.130	.113	.498	.015
	涙が止まらなくなることがある	-.043	-.014	.175	.416	.145
	過去のつらい経験が現在どのように役立っているかは話す必要がない	-.165	.327	-.080	.411	.006
	生活が空虚であると感じる人が多い	-.052	.118	.260	.301	.236
	警戒心が強い	-.051	.028	.252	.287	-.221
*	自殺をしてみようと考えたことがある	-.234	.236	-.028	.096	.654
	*人に自分の趣味を話したい	-.439	.038	.011	.172	-.506
	些細な欠点(時間にルーズ、など)について他者から心配された経験がある	.003	-.115	.090	-.001	.245

*は逆転項目

因子間相関	I	II	III	IV	V
I	-	.165	-.073	-.038	-.031
II		-	.335	.412	.026
III			-	.358	.168
IV				-	.186
V					-

第 1 因子は「休みの日に何をしているか人に話したい」、「人には大きい期待を抱いている」、「人には高い望みをかけている」、「人は何に対しても、できる限りベストを尽くしてほしい」、「人には秩序を守る人間であってほしい」の 5 項目から構成されており他者に対しての期待の高さとの関連が見られたため「他者への高い要求水準」と命名した。第 2 因子は「人のすることに対して十分だと感じられない」、「人のことは私が十分だと思う水準に達していない」、「人は私の期待に応じてはくれない」、「人の仕事の成果に対し、ほとんど満足できない」、「人の仕事の結果を見て、もっとよくできるはずだと思いつつも、落胆する」の 5 項目から構成されており完全主義との関連が見られたため「完全主義」と命名した。第 3 因子は「憂鬱なことが多い」、「いつもさわやかな気分である」、「普段からいらいらすることが多い」、「よく悲しくなる」、「自分の気持ちを抑えてしまう」の 5 項目から構成されており抑うつ傾向との関連が見られたため「抑うつ」と命名した。第 4 因子は「些細な欠点について思い悩んでいることを話したくない」、「過去の体験を話したくない」、「自分のせいで人が傷ついたことは誰にも話したくない」、「涙が止まらなくなることがある」、「過去のつらい経験が現在どのように役立っているかは話す必要がない」の 5 項目から構成されており閉鎖的であり警戒心との関連が見られたため「閉鎖的」と命名した。

次に、性格尺度の 4 因子の平均、SD、 α 係数を算出した。その結果を表 5 に示した。

表5.性格尺度の信頼分析

	平均	SD	α
他者への高い要求水準	2.34	.57	.79
完全主義	2.83	.65	.76
抑うつ	2.08	.56	.75
閉鎖的	2.49	.58	.68

「他者への高い要求水準」は、平均=2.34、SD=0.57 であり、「完全主義」は平均=2.83、SD=0.65 であった。「抑うつ」では平均=2.08、SD=0.56 であり、「閉鎖的」は平均=2.49、SD=0.58 であった。また、これらの内的整合性を検討するために α 係数を算出したところ、「他者への高い要求水準」では $\alpha = 0.79$ 、「完全主義」では $\alpha = 0.76$ 、「抑うつ」では $\alpha = 0.75$ 、閉鎖的では $\alpha = 0.68$ となり、「他者への高い要求水準」「完全主義」「抑うつ」の 3 つの因子においては十分な結果が得られたが、「閉鎖的」では十分な結果が得られず信頼性に疑問が残るが、今回はそのまま因子として分析を進めることとした。

2. 公的自己意識尺度、SRSED 尺度の分析

公的自己意識尺度、SRSED 尺度の平均値、標準偏差、 α 係数を算出し、その結果を表 6 に示した。

表6.公的自己意識尺度、SRSED尺度の平均、SD、 α 係数

	平均	SD	α
公的自己意識	5.21	.89	.87
SRSED	2.10	.53	.88

公的自己意識尺度の項目の平均値と標準偏差を算出したところ、平均値 5.21、SD=0.89 となった。また、内的整合性を検討するために公的尺度の α 係数を算出したところ、 $\alpha = 0.87$ であり、十分な結果が得られた。

SRSED の項目について平均値と標準偏差を算出したところ、平均値 2.10、SD=0.53 となった。また、内的整合性を検討するために SRSED の α 係数を算出したところ、 $\alpha = 0.88$ であり、こちらも十分な結果が得られた。

3.性格尺度と公的自己意識尺度、SRSED 尺度の相関係数

性格尺度と公的自己意識尺度、SRSED 尺度の相関係数を表 7 に示した。

表7.性格尺度因子と公的自己意識尺度、SRSED尺度の相関関係

	高い要求水準	完全主義	抑うつ	閉鎖的	公的自己意識	SRSED
他者への高い要求水準	-	0.34*	-.006	-.060	0.11	0.29*
完全主義		-	0.29*	0.32*	0.26*	0.24*
抑うつ			-	0.37*	0.47*	0.39*
閉鎖的				-	0.23**	0.17**
公的自己意識					-	0.25*
SRSED						-

** $p < .05$, * $p < .01$

SRSED 尺度と他者への高い要求水準では($r=0.29, p < .01$)、完全主義では($r=0.24, p < .01$)、閉鎖的では($r=0.39, p < .01$)とそれぞれ弱い相関がみられた。

公的自己意識尺度と SRSED 尺度において($r=0.25, p < .05$)と弱い相関がみられた。

また、公的自己意識尺度と、完全主義では($r=0.26, p < .01$)、閉鎖的では($r=0.23, p < .05$)となり、弱い相関がみられた。また、抑うつにおいて($r=0.47, p < .01$)と相関がみられた。また、因子間において、他者への高い要求水準と完全主義において($r=0.34, p < .01$)、抑うつと完全主義において($r=0.29, p < .01$)、閉鎖的と完全主義において($r=0.32, p < .01$)、閉鎖的と抑うつにおいて($r=0.37, p < .01$)と弱い相関がみられた。

考察

1. 性格尺度について

今回作成した性格尺度について平均と標準偏差を算出したところ、天井効果が見られたものが3項目あった。項目の内容をみると、「気が沈むことがある」「疲れやすい」の2項目については、下位尺度として抑うつと想定していたが、日常生活でも感じやすいことであることから天井効果が生じたと推測される。また「自分のすごく嫌な部分を見られたくない」という項目についても、下位尺度として自己開示を想定していたが、和田(1990)が、日本の若者は自分の趣味などを話して表面的には自己開示を行っているように見えるが自分の内面性に触れるような深いレベルの自分のことは誰にも伝えていないと述べていることから天井効果が生じたと考えられる。

同様にフロア効果の見られた2項目の内容を見ると、「朝のほうが調子がいい」「自分を傷つけてみたくなくなる」の2項目であった。前者においては質問項目が抑うつであるという内容よりも日常での内容を想像した可能性があると考えられる。後者では自傷行為に関する直接的な内容であったため、社会的望ましさが働いたのではないかと考えた。

また、因子分析の結果、想定した因子構造とは異なる構造になっていた。主に「抑うつ」と想定していたものが基準に満たず除外されたことや、因子分析の際に他の因子に含まれてしまったことから「閉鎖的」因子の内的整合性が低くなったと考えられる。各項目内容について再検討が必要であると考えた。

2. 性格尺度とSRSED尺度の関連性

性格尺度とSRSED尺度の関連については、「他者への高い要求水準」「完全主義」「抑うつ」「閉鎖的」の因子それぞれ間に弱い相関がみられたことから、仮説1は支持された。まず、摂食障害傾向が高くなるほど、他者に対しての要求が高くなりやすいということは、現在の状況に満足できていないということを表していると考えられる。八田・仁平(2008)の研究では、生活満足感も摂食障害傾向に関わる重要な要因であるとしている。このことから、自身の生活を満足感の得られるものにするため、他者への要求水準も高いものになっていくと思われる。

次に、完全主義になりやすいということは、今回の場合、他者の失敗にも敏感で、見逃すことができないという傾向になりやすく、少しでも完全にできなければ自己否定感と共に他者否定感も高まるということが推測できる。宮崎・緒方(2006)の研究では、拒食症タイプ、過食症タイプ共に、完全主義的性格との関連性が示唆されており、「家族からの自立や友人関係などのストレスをきっかけに、自己否定感が増幅されて、拒食から過食へとつながる可能性が考えられた。」としている。周囲の人間関係の中でうまく完璧にできなかったことへのストレスが、摂食障害傾向を高めていると考えられる。

そして、「抑うつ」になりやすいということについては、摂食障害傾向が高いほど、自分

の身体や家族についてよりネガティブな評価をする傾向がある(横山・小山,2005)という点から、常に周囲の目を気にし、自分に自信を持つことができないと考えられる。そのため、自分の気持ちを周囲に発信していくことに過度の苦手意識があり、抑うつ傾向になると推測される。

また「閉鎖的」な性格傾向とは、主に自己を他者に開示したくないという傾向で、これも周囲の目を気にするという点から、周囲にネガティブな評価を受ける可能性のあるものは見せたくないという気持ちが働いた結果であると考えられる。

3. 公的自己意識尺度と SRSED 尺度の関連性

公的自己意識と SRSED 尺度に弱い相関がみられたことから、公的自己意識が高いほど摂食障害傾向にあるという仮説 2 は支持された。これは、公的自己意識が高いことによって引き起こされる、理想の自己と現実の自己とのずれが明確になり、それが不快感や自己評価の低下につながり(山蔦・野村, 2005)、他者にわかりやすい体型を維持することや痩せることによって、評価を得て自尊心を保とうとしていると考えられる。公的自己意識が高い者は、低いものと比較したところ、身体に関する他者評価に不満をもっていると明らかになっている(山蔦・野村, 2005)。このことから体型をコントロールしたいという気持ちから摂食障害傾向につながると考えられる。

また、中学生から高校生の女子では男子と比べ公的自己意識が高く(桜井, 1992)、小学校から大学に通う女子が異性からどう見られているかという意識の強さが、女らしい身体である瘦身願望へとつながって摂食障害傾向を高めるものと考えている(鈴木・伊藤, 2001)。

4. 今後の課題

本調査結果において、当初想定していた解釈尺度のうち「抑うつ」項目の多くが、天井効果やフロア効果となり、また因子負荷量が低く、分析から除外されてしまった。これらの項目について再検討が必要であると考えられる。

また、本調査では因子分析を行った際に当初想定していた因子構造とは異なる因子構造となり、さらに第 5 因子を構成する 2 項目間に関連性がみられないとして分析から除外した。これらの要因として、自作の性格尺度の項目内容が十分に検討されておらず、偏りがあったことが考えられた。そのため、今後の課題として関連性があると推測される項目数間の偏りをなくす必要性があると考えられる。

結果として仮説は支持されたが、相関が弱かった部分がいくつかあった。しかしながら、それらの一部では、サンプル数を増やせばより強い相関がみられたと推測されるものもあった。そのため、今後の課題として、サンプル数を増やすということが挙げられる。

そして、本調査のテーマとして設定した摂食障害傾向と性格の関連性についての研究は多く、研究の追試という傾向が強かったため、独自性に欠けていたと考えられる。そのため、調査内容をより熟考して独自性を出すことが必要であったと考えた。

引用文献

- 榎本博明 1997 自己開示の心理学的研究 北大路書房
- 厚生科学研究費補助金特定疾患対策研究事業中枢性摂食異常症研究班厚生省特定疾患対策研究事業中枢性摂食異常症 1998 中枢性摂食異常症に関する調査研究：研究報告書 www.mhlw.go/shingi/2009/12/dl/s1204-7f/pdf (最終アクセス 5月10日)
- 厚生労働省 2009 平成21年国民健康・栄養調査
- 松本聡子・熊野宏昭・坂野雄二 1997 どのようなダイエット行動が摂食障害傾向や binge eating と関係しているか？— 日本心身医学会 37 (6) pp425 - 432
- 宮崎由子・緒方智子 2006 摂食障害傾向を示す女子大生の令理的特性と栄養状態評価 栄養学雑誌 64 (1) pp31-43
- 中村晃士 2004 摂食障害における完全主義傾向の意義について—対人恐怖との異同を巡って— 慈恵医大誌 119 pp13-26
- 中野敬子・臼田倫美・中村有里 2010 完璧主義の適応的構成要素と精神的健康の関係 跡見学園女子大学文学部紀要 45 pp75-89
- 大森智恵 2005 摂食障害を持つ女子大学生の性格特性について パーソナリティ研究 13 (2) pp242-251
- 大仁田あずさ・崔光善 2013 女子高生の身体像、自己意識とやせ願望が摂食行動異常傾向に及ぼす影響 薬膳科学研究所研究紀要 6 pp53-63
- 桜井茂男 1992 小学校高学年における自己意識の検討 実験社会心理学研究 32 (1) pp85-94
- 柴田利男 1990 青年期の身体満足度が対人不安および自己開示行動に及ぼす影響 心理学研究 61 (2) pp123-126
- 和田実 1990 青年の対人関係の変容 久世敏雄(編) 変貌する社会と青年の心理 福村出版 pp. 83-102.
- 八田純子・仁平義明 2008 摂食障害傾向女子高校生の日常生活および身体に関する評価 健康心理学研究 21 pp10-20
- 山蔦圭輔・野村忍 2005 女子大学生における食行動異常—自己意識保有傾向からの検討— 日本女性心身医学会雑誌 10 (3) pp172-180
- 矢澤美香子・金築優・根建金男 2013 青年女子のダイエットにおける完全主義的自己陳述尺度の作成と信頼性、妥当性の検討 パーソナリティ研究 21 (3) pp216-230
- 横山知行・小山智子 2005 女子大学生における摂食障害傾向と怒りおよび完全主義との関連 新潟大学教育人間科学部紀要・人文—社会科学編 7(2) pp165-174